

---

# 魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

ロキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは運命を変えし転生者

### 【Nコード】

N4122X

### 【作者名】

ロキ

### 【あらすじ】

ある一人の青年が自分の命と引き換えに一人の少女の命を救った。偶然現世を観察していた女神は人一人の運命を変えた青年の行為に感心し、青年に第二の人生を生きるチャンスを与えた。青年は女神から力と二人のパートナーを得て新たな世界を生きることになった。転生した世界は魔法少女の世界だった。その世界の原作を知る青年は女神からもらった力を使い二人のパートナーと共に少女たちを悲しみの運命から救うことを決意する。

魔法少女リリカルなのは運命を変えし転生者 始まります。

## プロローグ（前書き）

初めましてロキです。これまでたくさん二次小説を見て僕も書きたくなり今回初投稿しました。

何分小説初心者ですので駄文になるかもしれませんが僕なりに精一杯やっついていこうと思います。

もし興味のわいた方は読んでみてください。楽しんでいただけるようがんばります。

ではどうぞ。

## プロローグ

「ふあゝあああ」

よく晴れた空、それはもう晴れすぎではないかというぐらいに青く澄み渡った快晴の休日、俺はあくびをしながらあてどなく街を歩いていた。

せつかくの休日に家の中できろきろしているのももったいないと思いい外に出てきたのはいいが特に行きたいところがあるわけでもなくぶらぶらしているのも結構暇なものだ。

「さあゝてどうするかなあ。映画でも見に行こうかな。今ってなんかおもしろい映画とかやってたかな？」

俺は映画館のほうに向かって歩き出したが、そこでふと足を止めた。

「ん？」

視界の端に転がったボールを追いかける女の子が見えた。女の子はようやくやく止まったボールを拾い上げた。しかしそこに車が走ってきた。

「んなつ！？」

俺は目を見開いた。

「くそつ！！！」

気がついた時には女の子のほうに走っていた。このときは自分でも驚くぐらいのスピードが出ていたと思う。

「うおおおおお!!!」

俺は勢いを殺さずにそのまま女の子を抱きかかえた。それと同時に背中に凄まじい衝撃が襲いかかり俺は女の子を抱いたまま衝撃に従って道路を三、四回ほど転がった。ようやく止まると全身にとてつもない激痛がはしった。そんな激痛のなか俺は腕の中の女の子を見た。どうやら怪我らしい怪我はしていないようだ。

(ああ・・・大丈夫・・・夫・・・そうだ。よか・・・った)

そう思ったのを最後に俺の意識は闇に落ちた。

## プロローグ（後書き）

と、まあこんな感じですよ。いかがでしたでしょうか？  
この三連休は投稿できると思います。それではまたお会いしまし  
う。

## 第一話 女神との邂逅（前書き）

遅くなってしまう大変申し訳ありません。

このような作者ですがどうか最後までお付き合いをお願いします。

それでは第一話始まります。

## 第一話 女神との邂逅

S i d e ? ? ?

俺はいつたい、どうなったのだろう？

わからない。なにも思い出せない。

ここはいつたいどこなのだろう？なんだかすごく心地良い感じがする。まるで宙にふわふわと浮いているようなそんな感じが。

ああ、できるならずっとこうしていたい。なにも考えずにこの心地良さに甘えていたい。

「……………」

ん？いま何か聞こえたような……………？

気のせいかな？

「……………ねえ……………きて」

あ、また聞こえた。どうやら気のせいじゃないみたいだ。

「ねえ……………おきて」

誰かが俺を呼んでる？でも誰が？

「ねえ、おきてったら〜」

あ、今度ははっきりときこえる。誰だろう？すごくきれいな声だ  
けど。

「ねえ、ちょっと、きこえてる？」

ああ、やっぱりすごくきれいな声だな。こんな声に呼ばれるのも  
なんだかわるくないな。

「おい、もしも？」

いったい誰が呼んでいるのだろう？俺はつつすらと目を開けよう  
としたとき。

「もうっ、いい加減におきなさー！ーい！ー！」

「おうわああっ！！？」

いきなり耳のすぐ近くで叫ばれて俺は飛び起きてしまった。

「なっ、なんだ！？だれだ！？」

俺は慌ててあたりを見回した。

「あ、やっとおきた。もう、君いくらなんでも寝過ぎだよ？」

俺は声のするほうを向くとおもわず目を見開いた。

「でも、すごく気持ちよさそうな顔して寝てたね。フフフ。とり  
あえず、おはようかな？」

そこにはかるいウエーブのかかった長い金色の髪にサファイアの  
ように透き通った青い瞳をして神話なんかに出てくる神様なんか  
が着るような白い服を着て背中に大きな鳥のような純白の翼を生やし  
たとても綺麗な女の人がいたからだ。

「あ、あの・・・あなたはいつたい・・・?」

俺はその女性に面喰らいながらもなんとか質問をした。するとそ  
の女性はキョトンとした顔をした。

「?・・・あつ、そつかそつかまだ自己紹介してなかったね。  
ごめんごめん」

苦笑しながら謝る女性。

「えーっと、それであなたは?」

俺はもう一度質問をする。

「んんつ。それじゃあまずは自己紹介を。初めまして勇気ある人間  
君。私の名前はルティア、女神ルティアよ。よろしくね」

彼女は輝くばかりの笑顔でそう言った。

## 第一話 女神との邂逅（後書き）

かなりの間が空いてしまい申し訳ありません。

当分はもしかしたらこんな感じでやっていくことになるかもしれませんが。

このような駄目作者で恥じ入るばかりですが、自分なりに精一杯頑張っています。

## 第二話 とりあえず現状確認（前書き）

ロキです。休日なので連日投稿してみようと思って書きました。

女神と出会った主人公。はたして彼の運命はどこへ向かうのか？

それでは第二話始まります。

## 第二話 とりあえず現状確認

Side???

「・・・・・・・・・・は？」

俺はそんな間の抜けた声を出してしまった。しかしそれも無理はないと思う。俺の耳がおかしくなければ、今この女性は自分を女神だといった。普通に考えればこの女性には今すぐ精神科に行くことをお勧めするのだが、彼女の恰好や何より背中の羽は幻覚でもない限り間違いなく彼女の背中から生えているように見える。つまりこの人？は本当に・・・・・・・・

「ええ、本当に、正真正銘、間違いなく、本物の女神よ」

つて、え！？今俺が何を考えてるのか読まれた！？

「そりゃ読めるわよ。だって女神だし」

また読まれた！？

「じ、じゃああなたは本当に・・・・・・・・・・女神さま？」

「だから、そう言ってるでしょう。この背中の翼が見えないの？」

そう言っただけで彼女は背中の翼を指差した。

「ああ、はい。大丈夫です。見えています」

俺はとりあずそう言っておく。

「うん。よろしい」

彼女は満足げに頷く。

「あの〜、ところで……」

俺は体を起こした状態のまま目の前に立つ女性を見上げた。

「うん？」

「あなたが女神様というのは、まあ百歩譲って認めます。で、それはいいとして此処はいつたいどこなんですか？どうして俺はこんなところにいるんですか？」

俺はまずいちばん気になっていることを聞いてみた。

「うん、まあちゃんと説明するけど、そのまえにい聞いてもいい？」

「はい？」

「きみ、自分がどうなったのか憶えてない？」

「え？」

俺は女神（たしかルティアという名前だった）ルティアさんの質問を聞いて言葉に詰まった。

(俺がどうなったか？あれそういえば俺はなにが忘れてしているような  
なんだ？俺はなにを忘れているんだ？)

俺は頭を抱えて必死に記憶を甦らせようとした。すると俺の脳裏  
にズキツという痛みとともに一つのヴィジョンが浮かんだ。自分の  
腕に抱かれる小さな少女、自分と少女に迫りくる車、それらを思い  
出した俺は

(ああ……………そうか。俺は……………)

「俺は……………死んだんですね？」

つぶやくようにそう言う。

「……………ええ。そうよ」

ルティアさんは複雑そうな表情で答えた。

「そうですか……………あのルティアさん？」

「ん……………なに？」

「あの子は……………俺がかばった女の子はどうなりましたか？」

俺がそう聞くとルティアさんは少し驚いたような表情のあと笑顔  
で答えた。

「大丈夫。あの子は無事よ。あなたのおかげでかすり傷ひとつない  
わ」

「そうですか。……………よかったです」

俺は心底から安心する。そっか……………あの子は無事か……………。

「あなたは……………変わった人間ね」

ふとルティアさんが言ってきた。

「え？」

「だって、自分が死んだことよりも他人の心配をするんだもの」

ルティアさんの言葉に俺は苦笑する。

「ああ……………まあ、そうですね。でも俺の命ひとつで誰かの命を護れたなら俺はそれで満足です。……………ま、自己満足ですけどね……………」

俺の言葉を聞いたルティアさんは

「……………あなたは」

「？」

「……………良い人間なのね」

優しい笑顔でそう言った。

「……………!!?」

その言葉に俺は自分の頬が熱くなるのを感じた。自分の赤面した顔を見せたくなくて顔をそらす。こういうことを面と向かって言われるのはやはり恥ずかしいものである。

「うん。よし決めたわ!!」

ルティアさんは突然嬉しそうにいった。

「へ?」

俺はいきなりのルティアさんの声に驚いた。するとルティアさんは俺に満面の笑顔で言ってきた。

「ねえ、あなた………転生って興味ない?」

## 第二話 とりあえず現状確認（後書き）

今日はとりあえずここまでとします。

次回は主人公が女神から力を渡されます。楽しみにしててください。

ではまた次回お会いしましょう。

最後に感想を送ってくれた魁斗さん。ありがとうございました。お互いに頑張っていきましょう。他のみなさまもこれからできればどうか応援してください。感想などがあつたらどんどん送ってきてください。いつでも大歓迎です。それではまた。

### 第三話 俺の性分(前書き)

こんにちはロキです。つい調子にのってまたも連続投稿してしまいました。

少し調子にのりすぎという気もしますが。

まあ、暖かい目で見てください。

では第三話始まります。

### 第三話 俺の性分

S i d e ? ? ?

「……………え？転生……………ですか？」

俺はルティアさんの唐突な質問に戸惑ってしまつ。それはそうだろう。いきなり転生といわれてもどこたえればいいのかやら。

「あの……………ルティアさん」

「ん？」

「転生つて、あの転生ですか？前世の記憶をもつたまま生まれ変わるっていう」

俺はそんな質問をルティアさんしてみた。

「ええ、そうよ。その転生」

ルティアさんは変わらず笑顔で答えた。

「でも、どうして俺を？」

俺が聞くとルティアさんは俺と目線を合わせるように座った。

「ん、まあぶっちゃけると私があなのこと気に入っちゃったっていうのが主な理由なのよ」

「ルティアさんが俺を気に入った？」

鸚鵡返しに言う。

「そう。だってあなた今時の人間しては珍しいんだもの。今の時代に自分の身を投げ打ってでも他人を助けようとする人なんて中々いないわよ」

「ああ、まあそうかもしれないね。でもこれが俺の性分ってやつなんです」

そう俺は物心ついたときからこんな感じだった。目の前で誰かが泣いていればどうしても見過ごすことができなかった。迷子の子供を見かけたら一緒に親を探してあげたり、不良に絡まれてる人を見たらすぐさま助けに入ったり、本当になんと酷い目にあってもこの性格は直らなかつた。でもそれでもいいかと思う自分もいた。やっぱり俺は人の泣いてる顔よりも笑ってる顔のほうが好きだから。

「……そう」

ルティアさんがまた優しい表情で見つめてくる。あれ？もしかしてまた心を読まれた？うわゝ恥ずかしい

「んんっ、そ、それで転生の話ですけど」

俺は軽く咳払いをして話をもとに戻そうとした。

「ああ、そうだったわね。で、どうする？」

「そりゃあ、確かにちょっと興味はありますがけど」

確かに第二の人生を与えてくれるというのなら是非ともお願いしたいところだ。

「ちなみに行き先の世界はこっちで決めることになるからね」

「え？俺に選択権なしですか？」

「ええ。こればかりは決まっていることだから。ごめんなさいね」とルティアさんは申し訳なさそうな顔をする。そんな顔をされては文句も出ない。

「わかりました。で、どうやって決めるんですか？」

「ああ、それはね、これを使うの」

そう言つとルティアさんはどこからか丸い穴の開いた四角い箱を取り出した。

「あの、それは？」

俺は箱を指して聞いた。

「この箱の中には色々な並行世界の紙が入っているの」

「並行世界って、パラレルワールドのことですか？」

「そうよ。ただ普通の世界とも違う・・・例えばそうねあなたの世界にあるマンガやアニメに酷似した世界とかね」

「へえ、すごいですね」

俺は率直な感想を口にした。

「それじゃあ、さっそく決めちゃいましょうか？」

「あ、はい。お願いします」

俺が答えるとルティアさんは手を箱の中に入れた。俺はどんな世界になるのだろうと内心ワクワクしていた。それはそうだろう俺の世界にあるマンガやアニメの世界に行けると言われてワクワクするなどというほうが無理がある。自慢ではないが俺はこれでも生前かなりのマンガやアニメを見ていたのでその方面の知識にはけっこう自信があったりする。

「んーっと……それっ」

ルティアさんは箱から一枚の紙切れを取り出して見た。

「えーっと、なになに、ふんふん、なるほど。あなたの転生先が決まったわよ」

「どこですか？」

俺が聞くとルティアさんはにっこりと笑って

「あなたの転生先は……リリカルなのはの世界よ」

そう答えた。

### 第三話 俺の性分（後書き）

申し訳ありません。力を与えられるところまで書きたかったのですが、書いているうちにこうなってしまうました。中々上手くないものですね。次回こそは主人公の能力が決まります。お楽しみに。

感想、意見等お待ちしております。ではまた次回。

#### 第四話 与えられし力 そして旅立ち（前書き）

．．．．．なんとというかその．．．．．やっぱり調子に乗りすぎですよ、これ。でもどうしても、書きたいって衝動が抑えられなくて書きちゃいました。

一日のうちに三話連続って．．．まあ、他にもやってる人はやっていますよね？

転生先も決まりいよいよ主人公が力を渡されます。

それでは第四話始まります。

## 第四話 与えられし力 そして旅立ち

S i d e ? ? ?

「リリカルなのはの世界って……マジですか？」

俺はおもわず聞いてしまった。

「ええ、マジよ。あら、もしかしてこの作品知ってるの？」

「あーはい。ていうか俺の好きなアニメの上位ランクに入ってるし」

そう。何を隠そう魔法少女リリカルなのはシリーズは俺が生前嵌っていたアニメのひとつなのである。まさかその世界にいけるなんて。ああ、やばい興奮しすぎて心臓がバクバクしてる。

「へえ、そうだったんだ。運がいいわねあなた」

死んでしまったこの状況で運がいいと言われてもなんか複雑である。

「それじゃあ次に、あなたに力をあげなきゃ」

「へ？力？なんの？」

「もちろん、その世界で生きていくための力よ」

。ルティアさんの言葉に俺ははっとする。これはもしかしたら……

「それでどんな力が『あの、ルティアさん』・・・？なに？」

俺はルティアさんの言葉を遮り聞きたいことを聞く。

「その世界で原作を変えることってできますか？」

これが俺の聞きたいことだった。初めてリリカルなのはの作品を見たときからずっと思っていたことだった。もし俺に力があってこの世界に行けたなら彼女たちの悲しい運命を変えたいと。なのはは幼少時代に孤独を味わいそれが原因で無茶をして墮ち、一度は魔導師を断念しかけた。フェイトは大切な母親と分かり合えぬまま母と姉を失うこととなり、はやては共に生きられるはずだったリインフォースと永遠の離別による苦しみを味わった。

たしかにそれを乗り越えていったからこそ彼女たちはあそこまで強くなることのできたのだろう。しかし彼女たちのあの小さな肩にあれほどの苦しみを背負わせるといっはどうしても俺には納得がでなかつた。あんなものわずか九歳の女の子に背負わせていいものじゃない。救いたいと思った。護りたいと思った。例えそれが偽善でも、エゴでも、自己満足でも、それでもいい。彼女たちが笑顔でいてくれるのなら。

「あなたは、変えたいのね。彼女たちの・・・運命を」

ルティアさんは真剣な表情で言ってきた。

「・・・はい」

俺はそれに同じく真剣な表情で答える

「やっぱり……あなたは優しい人だね」

「そう……なんででしょうか？」

「ええ。それもとびっきりの……ね」

その時のルティアさんの笑顔はまさに聖母のように慈愛に満ちていた。

「さっきの質問の答えだけど、大丈夫よ。さっきも言ったけどその世界はアニメの世界そのものってわけじゃなく、そのアニメに限りなく酷似した並行世界だから。だからどんなふうに原作を壊してくれても問題ないわよ。すきなだけ暴れちゃっても」

と今度はルティアさんはいたずらっぽく笑う。

「わかりました。ありがとうございます」

俺はとりあえず安心する。

「で……あなたにあげる力なんだけど」

「はい？」

「こんなのはどうかしら？」

ルティアさんは俺に近づいて耳打ちをする。

「じじよじじよ」

「……え！？いいんですかそんなの!？」

俺はルティアさんの提案した能力に驚いてしまう。まあたしかにその能力なら問題なく原作ブレイクもできるだろうが。

「いいのよ。いったでしょあなたのこと気に入ったって」

彼女の屈託のない笑顔におもわずこっちまで顔が緩む。

「わかりました。じゃあお言葉に甘えてその力をお願いします」

「ええ！まかせてちょうだい!!」

そういつてルティアさんは俺に向かって両手をかざす。するとルティアさんの両手から光が溢れてきてその光は俺の体の中に吸い込まれるように入っていた。

「うん、これでいいわ」

「え、もう終わりですか？」

なんだかずいぶんあっさりしてるな。まあいいけど。

「あ、それからあなたの前の名前はもう使えないから新しい名前が必要よ」

「あたらしい名前ですか？そうですね」

俺はしばらく考えこむ。

「う〜ん……………よし、これだっけ」

「なんて名前にしたの？」

「燎、俺の新しい名前は神薙かんなぎ 燎しやうだ」

ちよつと中二病くさいかなとは思っただけどまあいいだろう。

「燎……………良い名前ね」

「あ、ありがとうございます」

笑顔で言われてつい赤面する俺。

「じゃあ、準備もできたことだし、そろそろ行く？」

「ああ、はい。お願いします」

俺は何故か背筋をのばして返事をする。

「ああ、そうそう。最後にもう一つだけ言っておかないと」

「？なんですか？」

「あなたが世界に転生する影響でその世界になにかしらのイレギュラーがおきる可能性があるの」

「イレギュラーですか？それはどんな」

「ごめんなさい。それは私にもわからないの。でもくれぐれも注意してね」

心配そうなるルティアさんに俺は笑って言った。

「大丈夫ですよ。俺にはルティアさんからもらった力がありますから」

「燎……」

「それじゃあ、いってきます。色々ありがとうございます」

「クスツ、ええ。いつてらっしゃい。あなたみたいな優しい人にあえて嬉しかったわ」

ルティアさんの笑顔に見送られ俺は光に包まれた。

こうして俺の異世界での第二の人生が幕を開けた。

#### 第四話 与えられし力 そして旅立ち（後書き）

ついに転生です。ここまでけっこう長くなってしまい申し訳ありませんでした。

主人公の能力についてですが、ネタバレとして主人公紹介のブログファイルにて明かそうと思います。楽しみにしていただけいたの方々、すみませんでした。

それではまた次回お会いしましょう。

## 第五話 到着 魔法世界（前書き）

どうもロキです。

少し間が空いてしまいましたですが投稿できました。

やはり実際に小説を書いてみるとその難しさがよくわかります。

しかしこれも小説製作の醍醐味というものでしょうか。

では第五話始まります。

## 第五話 到着 魔法世界

S i d e 燎

暖かい日差しを感じて俺は目を開ける。

「うん……ここは？ああ、そうか転生したんだっとな」

俺は体を起こして立ち上がった。どうやらここは森の中みたいだが俺はリリカルなのは世界のどこに転生したんだ。

（ああ、こんなことなら場所を決めておけばよかつたな……ま、しかたないか）

思わず愚痴をこぼしたが過ぎたことと思って気を取り直すことにした。

「さて、まずはここがどこなのか確認しないとな。……にしてもなんか視線が低いような……!？」

俺は自分の手を見て目を疑った。

「な、なんだ？……これ？」

その手はどうみても大人の手ではなく五、六歳ぐらいの子供の手だった。

「どうなってんだ？……ん？」

俺は半ズボンの右のポケットになにか入っているのを感じて手を入れてみた。ちなみに今の俺の服装は俺が前の世界で着ていた半袖のシャツを今の俺のサイズに縮めてジーパンを半ズボンにしたのだ。

「これは・・・紙・・・？」

その紙には綺麗な字が書かれていた。

「ルティアさんからのメッセージ・・・か？」

俺は紙に書かれた字を読んだ。そこにはこう書かれていた。

『燎へ、これを読んでいるということは無事に転生できたということだね。何よりだわ。』

これを入れたのはあなたに言い忘れたことと私からいくつかサービスがあることを伝えるためです。

まず、いまのあなたの体はちょうど五歳くらいの体になっていること、つぎにあなたを海鳴市から少し離れた森のところにあなたを転生させたこと、それと能力を使って鏡を作って自分の顔を見てください。きつと驚くと思います。』

顔・・・？顔がどうかしたのだろうか？とりあえず俺は書かれているとおりに能力で鏡を作って自分の顔を映した。

「!？・・・な、なな・・・」

俺はまたしても自分の目を疑ってしまった。

「なんじゃこりゃあああああああ!!!?」

絶叫する俺、しかしそれも当然だ。鏡に映った俺の顔はどこからどう見ても俺の前の世界で大人気のライトノベル、灼眼のシャナのシャナの顔になっていたのだから。……髪こんなに伸びてたのか、どうりで頭が重いと……。じゃなくて!!

「はっ、ま、まさか……」

バツ!

俺は慌てて自分の股間に手をあててみた。

「はあ、よ、よかった。ちゃんとある」

俺は安堵のため息を吐いた。確かに男の証しの感触がしたからだ。

性転換の可能性がないことを確認した俺は手紙の続きを読むことにした。

『ちなみにどうしてその姿にしたかというと私がああの作品を好きだから それに最近じゃそういう女の子みたいな男の子が流行ってるってきいて、ついやつちゃった……。てへっ』

ルティアさん……Orz

というかそんな理由で勝手に他人の外見を変えないでほしい。

気を取り直して続きを読む。

「それで次にサービスの件だけど流石にあなた一人じゃ色々大変だろうと思ってあなたにパートナーを送っておいたわ。天道宮にいると思うから後で会いに行つてあげて。ちなみに天道宮のほうもサービスだから。修行場にするなりなんなり好きに使つて。多分今海鳴市の海上に浮いてると思うわ。行きたいときは【開け、天道宮の扉】で行けるようになってるから。あ、もちろんそれとは別にあなたとパートナーの住む家もちゃんと海鳴市に用意してあるから安心して。あと今の時期は無印が始まる四年くらい前だから今のうちになのはちゃんに会つておいたほうが良いと思うわ。それじゃ第二の人生思う存分楽しんでね　女神ルティアより」

ルティアさんいくらなんでもちよつとサービスのしすぎじゃないか。つていうか天道宮つてあれ管理局からみたら完全にロストロギアだよな？・・・大丈夫か？それにパートナーか・・・どんなやつなんだろ？

「まあとにかく、まずは天道宮に行つて俺のパートナーとやらに会いに行くとするか」

そういつて俺は天道宮に行くためのキーワードを唱えようとする。つーかこれ某妖精の尻尾の星霊魔導師のお嬢様の呪文と同じだよな？俺達の世界のマンガやアニメつて神様の世界でも人気があんのかな？

「ま、それはともかく行くか。【開け、天道宮の扉】」

俺がキーワードを唱えると地面に灼眼のシャナの自在式のような紋章が浮かび上がりその紋章から光があふれ俺は一瞬のうちに転移した。

## 第六話 合流 二人のパートナー（前書き）

どうもロキです。やっと更新できます。小説を書く時間というのはとれそうでとれないものだ、最近思います。

まあ、それはさておき

無事転生した燎。女神ルティアから送られてきた彼のパートナーとは？

彼のデバイスも登場します。

では、第六話始まります。

## 第六話 合流 二人のパートナー

Side 燎

ルティアさんからの手紙を読んで俺はパートナーに会うために天道宮にやってきた。転移が終わったのを感じて目を開けてみるとそこには周り一面を湖に囲まれた古めかしくも荘厳な西洋風の城であった。

「ここが……天道宮……か」

――天道宮：灼眼のシャナに登場する宝具の一つ、その全体を泡のような異界秘匿<sup>クリュプタ</sup>の聖室により覆い隠し、内に在るものの姿と気配を外界より完全に遮断し、自在に空を浮遊する移動城砦。紅世の王、髓の楼閣ガヴィダが建造――

「うわー、実際に見てみると本当にでかいな」

俺は生の天道宮を見ることができ、感動してしまった。

「っと、いまはそれよりも、パートナーを探さない」と

ここに来た本来の目的を思い出し、足を進めようとしたら、俺の目の前にふわっと二つの人影が下りてきた。

「うわ!?!」

俺は驚いて一歩後ずさった。

「お待ちしていたのであります」

『会合期待』

その人影の片方から二人分の声が聞こえてきた。・・・あれ？今の声って、この人もしかして・・・

その二つの人影は片方は丈長のワンピースに白いヘッドドレスとエプロンを纏った一見してメイドとわかる装い。肩まで切りそろえた髪に、無表情な端正な顔立ち。

「ほう、お前が私たちのマスターか、男と聞いていたんだが、違ってたか？」

と、もう片方の人影の美しい金色の髪にゴスロリような服の上に黒いマントを着た十歳前後の可愛らしい少女が外見に似合わない話し方で聞いてくる。・・・ってこの子は・・・

そう、俺の前に現れたのは、万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメルと真祖の吸血鬼エヴァンジェリン。A。K。マクダウエルだった。

- 万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメル：灼眼のシャナの登場人物。夢幻の冠帯ティアマトーのフレイムヘイズ。何万ものリボンを自在に操り敵を翻弄しながら戦う戦法を得意としており、まるで舞い踊るように戦う様から他のフレイムヘイズや紅世の徒からは戦技無双の舞踏姫の異名で知られている。シャナの育ての親の一人で弔詞の詠み手マージョリー・ドーとは飲み友達 -

- 真祖の吸血鬼エヴァンジェリン。A。K。マクダウエル：魔

法先生ネギま！の登場人物。外見は十歳位の可愛らしい少女だが正体は数百年の年月を生きてきた吸血鬼の真祖である。主人公のネギの父ナギに惚れて自分のものにしよとしたが返り討ちにあい登校地獄の呪いを掛けられ麻帆良学園に強制的に入学させられる。今は呪いのせいで力が弱まっているが、かつては闇の福音や多くの異名で恐れられた悪の魔法使い。ネギとは最初は敵同士だったが紆余曲折の末ネギを気に入り自分の弟子にする。いまだにナギに惚れている――

どうしてこの二人が・・・？ま、まさか・・・

「あ、あの、えっと・・・君たちが俺のパートナー・・・なのかな？」

一応、俺は二人に聞いて確認をしてみる。

「そのとおりであります」

『正鵠』

「ああ。私たちがお前のパートナーのユニゾンデバイスだ」

「えっ？ユニゾンデバイス!？」

俺はエヴァンジェリンの言葉を聞いて驚いた。この二人がユニゾンデバイスだなんて。

「それ・・・どういうこと？」

「その言葉のとおり、私たちは本人というわけではなく、女神によ

ってヴィルヘルミナやエヴァンジェリンを素に作られたあなたのためのデバイスというわけであります」

「そ、そうなんだ」

にわかには信じ難い話だけど、ルティアさんならやるだろうな・  
・と納得している自分もいる。

「それともう一つ、女神からあなたに渡してほしいと頼まれたものがあるのです」

「え？なに・・・？」

ヴィルヘルミナはエプロンのポケットに手を入れて何かを取り出してその手を俺のほうに向ける。

「これなのであります」

ヴィルヘルミナが出したものは黒い宝石に金の輪を意匠したペンダントと群青色の珠に金の鎖をつけたブレスレット。

これ・・・ペンダントのほうは明らかに神器コキュートスだけど、ブレスレットのほうはわからないな。

「ヴィルヘルミナ・・・って呼んでいいんだよね？このペンダントとブレスレットは？」

「マスターのお好きなように。この二つはマスターの専用デバイスなのであります」

「俺のデバイス？」

「ああ、女神がわざわざお前のために作った特注品だ」

とエヴァンジェリンが答える。

まさか専用デバイスまで作ってくれるとは……ルティアさんサ  
ービス精神旺盛すぎじゃあ……

「ま、せっかくだし、好意に甘えようか」

俺はヴィルヘルミナからデバイスを受け取る。すると……

『お初にお目に掛かる、そなたが我が主なのだな？』

『ほおー、こりやまたずいぶんな別嬪さんだな！……ほんとに  
男か？』

受け取ったデバイスが話しかけてきた。この声、ペンダントのほ  
うはアラストールでプレスレットのほうはマスコシアスか？

「ああ、俺は神薙療。よろしくな」

『うむ。では主よ、さっそくマスター認証をせぬか？』

『おっ、そつだな。はええとこ済ませちまおうぜ？』

「ああ、そつだな」

二人？の言葉に頷く俺。

「では、我々も」

「そうだな。この際全員一緒に済ませないか？マスター」

全員一緒って・・・まあ、そのほうが手っ取り早くていいか。

「わかった。全員一緒に認証しよう」

エヴァの提案に賛成して俺はペンダントとブレスレットを両手に持ちヴィルヘルミナとエヴァの前に立つ。

俺は魔法陣を展開する。

「マスター認証、神雑燎 デバイス名設定 インテリジェントデバイス アラストール、マルコシアス ユニゾンデバイス ヴィルヘルミナ・カルメル、エヴァンジェリン」A「K」マクダウエル」

『認証完了 我は今より神雑燎を主と認める。我が紅蓮は主に仇なすすべてを焼き尽くさん』

『認証完了 よろしくな我が爪牙の担い手、神雑燎。我が爪牙はいかなる敵おも引き裂き食らい尽くす』

『認証完了 あなたの道の果てる時まであなたと共に行くことを誓うのであります』

『認証完了 お前を主と認めよう、坊や。お前を害そうとする者は誰であろうとを永久の闇に落としてやる』

「……ああ、みんな、これからよろしくな!！」

俺は精一杯の笑顔をこれから一緒に戦っていく仲間たちに向けた。

## 第六話 合流 二人のパートナー（後書き）

どうもロキです。いかがでしたか？

なぜヴィルヘルミナとエヴァにしたのかというと・・・ぶっちゃけ私が好きだからです。

まあ、こんな感じで今後も書いていきます。何卒応援をお願いします。

ではまた次回お会いしましょう。

**主人公&デバイス陣 プロフィール（前書き）**

というわけでプロフィール作ってみました。

ネタバレも含まれますがよかったですら見てください。

## 主人公&デバイス陣 プロフィール

主人公

名前：神薙燎 かななぎりょう

性別：男（の娘）

年齢：20歳 5歳

容姿：灼眼のシャナのシャナ

能力：超越神技 ちようえつしんぎ - 自分の知っている技や能力を全て使える。例：マンガやアニメの技等、他にも自分で編み出したオリジナルの技、能力も使用可能。

幻想神具 げんそうしんぐ - 頭に思い描いた道具をそのまま作り出すことができる能力。Fateの宝具やネギまのアーティファクト等。オリジナルの武器を創造することも可能。

戦神化 せんしんか - 自分の能力を完全解放する奥の手、身体能力や魔力値なども測定不能となり世界の理から外れた存在となるためどんな魔法や技も無効化されてしまう。ただし一度使うとその反動で二十四時間一切の能力が使えなくなってしまう。ただし身体強化などは可能。

身体能力：EX

魔力値：EXランク

魔導師ランク：SSSランク

魔力光：炎と見紛う紅蓮

バリアジャケット：黒いアンダーシャツとズボンの上に夜笠を着た姿

備考：車に引かれそうになった少女を助けた代わりに死んでしまったが、たまたま現世を観察していた女神ルティアにその行為を認められ、リリカルなのはの世界に転生することになった青年。性格は優しく、目の前で困っている人を見るとどうしても放っておけないお人好し。生前はかなりアニメやマンガが好きでリリカルなのはシリーズもよく見ていたため原作には詳しい。よく不良に絡まれていた友人やクラスメートを助けていたため、素手の殴り合いに自信がある。与えられた能力を使いなのはたちを悲劇の運命から救うために奮闘する。戦闘で本気を出すときは炎髪灼眼の打ち手の姿になる。

デバイス陣

・アラストール：インテリジェントデバイス

形状：金の輪が意匠された黒い宝石のペンダント（まんま神器コキュートス）

性格：堅物で生真面目、しかし主である燎をいつも心配している。燎を自分の主として全幅の信頼をおいている。

・マルコシアス：インテリジェントデバイス

形状：群青色の珠に金色の鎖をつけたブレスレット

性格：騒がしく無作法で下品だが仲間思いで情に厚い。燎のことをからかいつつも最高の主だと認めている。

・ヴィルヘルミナ・カルメル：ユニゾンデバイス

外見：灼眼のシャナのヴィヘルミナ

性格：無表情で無愛想に見えるが本当は情け深く感情的、礼儀正しく語尾に「」であります」をつける畏まった話し方をする。常に燎の傍らに控えており、燎のためならばいかなる危険

も厭わない。燎の笑顔に魅了されてしまい主従を越えた想いを燎に抱いているが普段は鉄面皮で隠している。作られる際ルティアによって少しばかり改良されたため原作のヴィルヘルミナと違い料理が得意。

能力：原作と同じ数万本のリボンを操って戦う。本気を出すときは専用デバイス、ティアマト

なりボンがはえた狐のような仮面に変化させる。ユニゾン時には燎がテ

ィアマトーの仮面をつけヴィルヘルミナの能力を使えるようになる。その際燎の髪の色は桜色になる。

・エヴァンジェリンⅡAⅡKⅡマクダウエル：ユニゾンデバイス

外見：魔法先生ネギまのエヴァンジェリン

性格：尊大な性格で主である燎に対しても同じように振舞うが、内心では燎を唯一無二の主として認めている。傍若無人なように見えるが弱者を躡るような行為は決してせず、涙もろい

一面もある。ヴィルヘルミナと同じように燎の笑

顔に魅了され惚れてしまう。何とか平静　　を保てるように日々苦勞している。吸血能力はあるが衝動はない。

能力：主に原作と同じネギまの氷系と闇系の魔法を使用する。他にも補助程度に幻術なども扱える。補助といってもティアナのそれとは段違いのレベル。ユニゾン時には燎の髪が銀髪になり氷属性と闇属性の魔法の威力が数十倍に上がる。

## 主人公&デバイス陣 プロフィール（後書き）

これが主人公とデバイス陣の紹介です。いかがでしたか？

自分でも少しチート過ぎかとも思ったのですが、これでなんとかやっています。

それではまた次回お会いしましょう。

**第七話 孤独の少女に救いの手を（前書き）**

ついに主人公が魔王の少女と出会います。

ここまででけっこう掛かりましたがようやくやくです。

はたして主人公は少女を孤独から救い出せるのか？

では第七話が始まります。

## 第七話 孤独の少女に救いの手を

Side 燎

無事にマスター認証を済ませた俺たちは天道宮から転移して、ヴィルヘルミナの案内でルティアさんが用意してくれた家へと向かった。

途中、ヴィルヘルミナとエヴァの顔が赤いような気がしたが、気のせいだろうか。

そして、目的地の家に着いてみると、なんとそこはFate/stay nightの衛宮士郎の家だったのだ。

……ルティアさん……あなたも好きですね……

三人で住むには少し大きいような気もしたが、天道宮よりはましかと思うことにした。まあ、あつちは城だしな。それからそれぞれの部屋を決めて、俺は今外出するために玄関で靴を履いている。

「どちらへお出かけでありますか？」

『先んずけて行先報告』

後ろから声が掛かって、振り返ってみると、ヴィルヘルミナが立っていた。

「ちょっと、そこら辺を散策にな。この町の地理も知っておきたいし」

俺は無難な答えを出す。

「では、私たちも一緒に」

『同伴申請』

ヴィルヘルミナとティアマトーが同行を申し出る。……しかし。

「大丈夫だよ。そんなに遠くには行かないし、そんなに遅くならな  
い内に帰ってくるから」

そう言ってヴィルヘルミナ達の申し出を断る。

「しかし……」

ヴィルヘルミナは顔を顰める。心配してくれるのは嬉しいが、今回はある目的のために一人のほうが都合が良いのだ。

「平気だって、アラストールやマルコシアスも一緒だし」

「………わかったのであります」

『了承』

ヴィルヘルミナは少し考えるそぶりを見せた後ティアマトーも一緒に承諾してくれた。

「それでは、私たちは美味しい夕飯を作って待っているのです  
す」

『晚餐期待』

「わかった。それじゃあヴィルヘルミナ、いってきます」

『では行ってくる。留守を頼むぞ、万条の仕手』

『ま、なにかあったらすぐに念話で知らせるからよ。んじゃ、行っ  
てくるぜ』

俺たちはそれぞれに返事をする。

「行ってらっしゃいなのであります」

『帰宅待望』

ヴィルヘルミナ達の見送りを受けて、俺たちは家を出た。

家を出てから一時間くらい経って、家の近所の大方の地理を把握  
し終えた俺は今町をぶらぶらと歩いている。

(近所の地理は大体分かったし、そろそろ本来の目的に移るか)

そう思って俺は公園を探した。何故かというところ恐らくそこに俺の目的である人物がいるはずだからだ。しばらく歩いてようやく小さな公園を見つけた。俺はその中に入ってあたりを見回す。そして俺の目にあるものが留まった。それは、ブランコに乗っているどこか寂しげな雰囲気を漂わせている今の俺と同年ぐらいの少女だった。

「……………見つけた」

俺は遠目からその少女をじいつと見つめる。栗色の髪を短いツインテールにしている、可愛らしい顔立ちに暗い表情を浮かべている。

原作開始時よりも幼いが間違いない。彼女こそ将来、管理局の白い悪魔、魔王の異名で恐れられることになる少女。原作の主人公高町なのはである。

「アラストール、マルコシアス、あそこのブランコに乗ってる女の子、見えるか？」

「む？……………うむ、見えるが？」

「あの嬢ちゃんがどうかしたのか？」

「彼女が原作の主人公、高町なのはだ」

俺は二人になのこのことを教える。

「ほう、あの子が……………」

「へえ、そうなのか。しかしあの嬢ちゃん、なんか妙に暗くねえか？」

「この頃、なのはの家でちょっとしたトラブルがあったな、多分それが原因だろう」

なのはの家の事情を掻い摘んで説明する。

『なるほどな。お前の外出の本当の目的は彼女か』

「ああ、まあな。でもこんな簡単に会えるとは思ってなかったよ」

『はっはくん、そうかい。・・・で？どうすんだ？我が慈悲深きお人好し、神薙燎？』

「・・・・・・・・決まってるだろ」

マルコシアスの問いかけに俺は薄く笑いを浮かべてなのはに近づく。

「ねえ、どうしたの？」

なのはに出来るだけ優しく話しかける。

「ふえ・・・・・・・・？」

なのはは可愛らしい声を出して、顔を上げてこちらを見る。・・・・・・・・あかん、マジで可愛ええわ、この子。お持ち帰りしたい・・・・・・・・つと、いかんいかん。思わず、某鈍女のようなことを思ってしまった。

「えっと・・・・・・・・あなたはだれ？」

なのはが少し泣きそうな声で聞いてくる。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

「な、なのは。たかまちなのはなの」

「なのは……いいね、可愛い名前だ」

俺はそう言ってなのはに笑顔を向ける。

「ふえっ!?!?!」

ん?……なんだかなのはの顔が赤いけど、どうしたんだろう?

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな?俺のことも燎でいいから」

「えっと……りょう……ちゃん……?」

「え?……りょうちゃん?」

「うん。りょうちゃん」

りょうちゃん、りょうちゃんね。これは間違いなく勘違いしてるな。

(くっくっ。りょうちゃん、りょうちゃんか……くっくっ)

(ぶっぶははっ、りょう、りょうちゃんって、おまつ、や、やっ……死ぬ。ぶっ)

「……なんだろう、なぜか無性にこのデバイスどもにこの世界でお馴染みの O H A N A S H I をしたくなってきたのだが。まあ、今はそれよりもなのはの誤解を解くのが先だな。」

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから言っとくけど、俺は男だから」

「ふえっ！？そ、そうなの？ご、ごめんね。だってすごく可愛い顔してるから」

ぐはっ！……け、けっこうきついもんだな。可愛いって言われるのって……。

「う、うん。大丈夫。気にしてないから。女顔だって自覚あるし……」

なんせ、シャナの顔だもんな。無理もないか。

「それで、なのははなんでさっき寂しそうな顔してたの？」

気を取り直して俺はなのはに質問する。

「えっ？そ、そんなことないよ。なのは、べつにさびしくなんて……」

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でよければ話してみるよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

本当は知っているが、俺は敢えてなのはに聞くことにする。彼女の心の闇をほんの少しでも理解するために。なのはしばらく俯いていたが、やがてぼつりぼつりと話し始めた。

「あのね、なのはのお父さんがね、じこにあつてね、おおけがしちやつたの。それでね、お父さんがよくなるまでお店をがんばらなきゃならないの。それで、お母さんとお姉ちゃんはすごく忙しそうでお兄ちゃんはなんだか毎日怖い顔してるの。みんな、誰もなのはこと見てくれないの・・・ひつく、だれも、なのはのこと・・・うつく・・・かまってくれないの・・・でも、いま、みんなすごく忙しいから・・・ひくっ・・・わがままいっちゃ・・・いけないの・・・ひっ・・・がまんしなくちゃ、いけないの・・・うつく・・・がまんして、いいこでいなくちゃ・・・いけないの。いいこでいなくちゃ・・・だめなの・・・だって、めいわくかけたら・・・ひつく・・・みんななのはのこと・・・きらいに・・・なつちゃうから。そしたらなのは・・・ひとりぼっちになつちゃうから・・・だから・・・うつ、うええ」

・・・ああ、やっぱりこのときのトラウマがなのはの生き方を決めたんだ。誰にも迷惑を掛けたくない。迷惑を掛けて、嫌われで、独りぼっちになりたくない。だから、体の限界なんて考えずにあんなにポロポロになるまで無茶を続けたのか。その気持ちはわからなくはない。でもそれじゃあ、あまりにも・・・あまりにも・・・。

「なのは・・・」

フワッ

「ぶえっ?」

ギョッ

気が付くと俺はなのはを抱き締めていた。

「り、りょうくん……?」

「……しなくていい」

「え……?」

「がまんなんてしなくていい」

俺は囁くように訴えかける。この馬鹿みたいに優しく不器用な少女の心に俺の気持ちが届くように。

「で、でも……」

「無理して、我慢して、良い子でいることなんてないんだ。辛いんなら辛いつて言っつていいんだ。苦しいなら苦しいつて言っつてもいいんだ。誰もそんなことでのなのはのこと嫌ったりなんてしないから」

「りょうくん……」

「なあ、なのは。言葉ってなんのためにあるのか知ってるか?」

「え……?」

「それはな、伝え合うためだ。自分の想いや気持ちをちゃんと言葉にして相手の心に届けるためだ。言葉だけじゃ伝わらなこともある

だろう。でも言葉にしなきゃ伝わらないことだって確かにあるんだ」

言葉にせず気持ちのすべてを伝えられるならどんなにいいか。でも人はそんなに器用じゃない。そんなことができる人間なんて滅多にいないだろう。だから言葉が必要なんだ。伝えたい想いを、知ってほしい気持ちをちゃんと相手に届けるために。

「なのは、言いたいことがあるならちゃんと言うんだ。言いたい言葉や気持ちを無理に押し詰め続けるといつか心が壊れてしまう。伝えたい言葉を相手に伝えることは全ての人間が持つ権利だ。誰もそれを責めることはできない」

「……うん」

「だからなのは、お前も我慢なんかするな。言いたい言葉を、自分の家族に伝えるんだ。大丈夫、きっとお前の家族は聞いてくれる。お前が家族を好きなと同じくらいお前の家族もお前のことが大好きなはずなんだから」

「うん、うん」

「それとな、なのは、自分ひとりじゃできないことがあったら誰かを頼れ。お前は一人で頑張りすぎだ」

「そ、そうかな？」

「そうだ。誰にも頼らないってのは強いってことじゃない。それはただ誰かを信じるのが、誰かの手を掴むのが怖いだけだ」

「うん。……あ、あのねりょうくん、お願いがあるんだけど……」

「・・・いいかな？」

「お願い？・・・ああ、いいぜ。言ってみるよ」

「あのね、いまだけ、思いつきり泣いてもいい？それでなのはが泣き止むまで抱き締めててくれる？」

これは・・・俺の言葉を受け入れてくれたということの良いんだろうか。

「当たり前だろ。思いつきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでこうしてやる。だって、俺たちはもう・・・友達なんだから」

この言葉を皮切りになのはの目から涙が溢れ出てきた。

「うっ、うわああああん！！さっ、さびかったよおっ！！くるしかったよおっ！！ずっと、さびしくて、くるしくて、つらくて、なきたくて、でも、だれにもいえなくて！！ひっ、ひっく。うえ、うええええん！！！！」

抱きついて俺の胸で泣きじゃくるのはを俺は優しく抱き締め続けた。彼女が今まで心の奥に溜め込んでいたものを全て吐き出して心から笑えることを願いながら。

この日、少女を縛り続けていた孤独という名の鎖は全て砕かれた。一人の心優しき少年の想いという名の剣によって。

第七話 孤独の少女に救いの手を（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

私としても今回ののはかなりの自信作なのですが。

では感想や意見などいつでもお待ちしております。

また次回お会いしましょう。

## 第八話 炎髪灼眼と白い魔王（前書き）

どうもロキです。時間ができたので、更新させてもらいました。

なのはの心を孤独から救った燎、さて彼の次の目的は・・・？

それでは、第八話始まります。

## 第八話 炎髪灼眼と白い魔王

S i d eなのは

わたしのなまえは、たかまちなのはといいます。今わたしのいえはとてきたいへんです。お父さんがじこにあつて、おおけがをしてしまいました。お母さんとお姉ちゃんはお父さんがよくなるまでお店をがんばらないといけません。お兄ちゃんはなんだかいつも怖い顔をして剣をふっています。

みんな、なのはのことをみてくれません。なのはは毎日ひとりぼっちでさびしいです。でもがまんしないといけません。わがママを言ってみんなをこまらせたくないから。だからわたしはひとりぼっちでもがまんしていい子でいらないといけません。わがママをいったら、きつとみんななのはのときらいになっちゃうから。・・・でも、やっぱりひとりぼっちはさびしいです。なきたいです。でもないちゃだめです。なのははいい子でいらないといけないんです。・・・でも・・・でも。

そんなときでした。

「ねえ、どうかしたの？」

「ふえ？」

とつぜん、こえを掛けられました。見上げてみると、きれいな黒いかみをした、とても可愛い女の子が立っていました。

「えっと……あなたはだれ？」

わたしは誰なのかききました。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

おんなのこは、そう答えました。でも女の子なのにおれってちょっとおかしいです。

「な、なのは。たかまちなのはなの」

わたしは自分のなまえを言いました。

「なのは……いいね、可愛い名前だ」

そう言ってその子はわたしに笑いかけました。

「ふえっ！？／＼／」

わたしは思わずドキッとしてしまいました。だってその子の笑顔はとてもきれいで、かわいくて、そしてとても、やさしい笑顔だったから。

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のことも燎でいいから  
そう言われたので、わたしはなまえを呼んでみました。

「えっと……りょう……ちゃん……？」

「え？……りょうちゃん？」

わたしがそう呼ぶとりょうちゃんは目をパチクリさせました。・  
・あれ？なにかいけなかったかな？

「うん。りょうちゃん」

わたしはもういちど、りょうちゃんのなまえを呼びました。

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから言っとくけど、俺は男だから」

「ふえっ！？そ、そうなの？ご、ごめんね。だってすごく可愛い顔してるから」

びつくりしました。なんとりょうちゃん……いえりょうくんは、男の子だったのです。あんまり可愛い顔してるから女の子かと思っしまいました。わたしはりょうくんにあやまりました。りょうくんは気にしてないと言ってくれました。

「それで、なのはなんでさっき寂しそうな顔してたの？」

りょうくんはふいにそう聞いてきました。

「えっ？そ、そんなことないよ。なのは、べつにさびしくなんて……」

りょうくんにそう聞かれてわたしはさっき泣きそうになってたのを見られたと思って慌ててわらってこたえました。

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でよけれ

ば話してみろよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

そう言われて、わたしは話していいのかまよってしまいました。でもわたしは不思議と、りょうくんになら話してもいいんじゃないかと思いました。そう思うとわたしはいつのまにかりょうくんにいえのことを話しはじめていました。でも話しているうちにだんだんとかなくなってきた、なきそうになっけしてしまいました。

すると、りょうくんが・・・

「なのは・・・」

フワッ

「ふえっ？」

ギョッ

なのはのことをだきしめてくれました。りょうくんのからだは、あたたかくて、なんだかすごくあんしんします。それにとってもいいにおいがします。やさしいお日さまみたいなにおい。

「り、りょうくん・・・？」

あんまりいきなりだったから、なのはがびっくりしていると。

「・・・しなくていい」

「え・・・？」

「がまんなんてしなくていい」

そつりょうくんはいいました。

それからりょうくんは、たくさんのことをなのおしえてくれました。がまんなんてしなくていい、いい子でいなくてもいい、言いたいことがあるのならちゃんと言う、ひとりでがんばらないで、こまったときはだれかにたよる、それはけっしてわるいことじゃない。りょうくんのことをばを聞いているとずっとくるしかったのはのむねのおくがあつたかくなつていくような気がしました。

わたしはもうがまんができなくなつてきて、りょうくんにないているあいだけだきしめてほしいとおねがひするとりょうくんは……

「当たり前だろ。思いつきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでこつしてやる。だって、俺たちはもう……友達なんだから」

そのことをきいて、すぐくうれしくなつてわたしはもうげんかいでした。いままでむねのおくにおしこめていたものを、ぜんぶはきだすようにわたしはりょうくにだきついておおごえでなきました。

りょうくんは、わたしが泣き止むまでずっとやさしくだきしめていてくれました。

Side End

Side 燎

なのはがようやく泣き止んで俺たちは今、公園のベンチに座っている。かなりの時間なのは泣いていた。ずいぶんと長い間溜め込んでいたのだろう。これで少しはなのはの心を軽くできればいいのだが。

「あ、あのね、りょうくん。ごめんね、なんだかいっぱい泣いちゃって」

隣に座っているなのはが謝ってきた。

「謝らなくていい。言ったら？泣きたいときは思いっきり泣けばいいって。それでなのはの気が晴れたのなら、俺は満足だよ」

俺はそう言ってなのはに笑いかける。

「う、うん。ありがとね、りょうくん／＼／＼」

なんだかなのはの顔がまた赤いのだが、風邪でも引いたのか？

(・・・なあ、アラストールよお、これってよ・・・)

(・・・うむ。間違いないだろうな。まったく、随分と罪作りなことだ)

(つつか、燎のやつ、ぜってー気づいてねえよな?)

(どつやらそのようだな。やれやれ、我らが主は些か以上に鈍感なようだ。どつぞのミステスを思い出す)

「……なんかすごく失礼なことを言われたような気がするのはなんでだ？」

「りょうくん、本当にありがとね。わたしすごくうれしかった。がまんしなくていいって言ってくれて、泣いてもいいって言ってくれて、それから……友達だって言ってくれて……」

なのはは笑いながらそんなことを言ってくる。むう、俺としてはそんなに大したことをしたつもりはないのだが……。改めて言われると、なんだか恥ずかしいな……。

「気にするなよ。俺たちが友達なのは本当だろう？俺たちはもうお互いに名前を呼んでるんだから」

「なまえを呼べば友達なの？」

「そうだよ。いいか、なのは？友達を作るときに一番大切なことはな、まず名前を呼ぶことだ。名前を知らなきゃ友達になてなれないからな。だからまず、名前を呼ぶんだ。君とかあなたとかじゃなく、相手の目を見てな。それが友達になるための第一歩だ。名前を呼ぶこと、全部まずはそこからなんだ」

「なまえをよぶこと……うん！わかった！」

なのはは弾けるような笑顔で答えた。ああ、これだ。俺が見たかったのはこの笑顔なんだ。俺はこの笑顔を護るためにこの世界に来たんだ。と俺は改めて自分の気持ちを確認した。

それにしても、こんな優しい子にこんなに寂しい思いをさせるなんて、共弥のやつはなにをやってるんだ。こんなときこそ長男が家

族を支えなきゃいけないんだろうが。これは少し O H A N A  
S H I をする必要があるな。

「りょうくん？どうかしたの？」

と、なのはが聞いてきた。おっと、いかんいかん。つい考え込んでいたようだ。

「いや、なんでもないよ。大丈夫」

俺はあたりさわりのないように答えた。

「さてと、いつまでも座っててもつまらないし、遊ぼうか、なのは？」

「うん！遊ぼうりょうくん！！」

俺の誘いに嬉しそうに答えるなのは。

「それじゃあ、なにして遊ぼうか？」

「なのは、おにごっこがしたいの！」

「鬼ごっこね、じゃあなのはが鬼な！」

そう言った瞬間、俺は走って逃げだした。

「じゃあ！？り、りょうくんずるいよ。まっつて〜！」

不満を言いながらもどこか楽しそうに俺を追いかけるのは。俺

たちの鬼ごっこが始まった。

（なのははもう大丈夫そうだな。さて次は………土郎さんだ）

俺はなのはから逃げ回りながら、次の目的を定める。

## 第八話 炎髪灼眼と白い魔王（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

次回は士郎の治療とシスコンとの対決です。ついに燎のチートの一端が垣間見れるかもしれません。

それではご感想や意見などお待ちしております。

次回をお楽しみに。

## 第九話 治療（前書き）

申し訳ございません。シスコンとのバトルを書くつもりだったのですが。

楽しみにしていただいた方々、本当に申し訳ございません。

次回こそ本当にVSシスコンです。

## 第九話 治療

S i d e 燎

あの後、俺はなのはと鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたりと思いつきり遊んだ。なんだか前世の子供の時よりも遊んだような気がする。ちなみに遊んでいる時になのはが四、五回ほど転んだ。幸い怪我はしなかったが、どうやら運動神経が切れてるといのは本当のようだ。

まあ、そんな感じで俺たちは二、三時間ぐらい遊びまわった。なのも楽しんでくれたようで何よりだ。しかし、流石になのはは疲れてきたようだ。俺のほうはそんなに問題ないのだが。ま、こちら辺で今日はお開きにするか。

「なのは、今日はもうここまでにしよう」

俺はなのはに終わりにするように言う。

「え〜？でも」

どうやらなのはは不満そうだ。いや、二時間以上も遊んでまだ足りないんかい、この子は。

「だ〜め。あんまり遊びすぎると疲れて動けなくなっちゃっただろ。今日はもう終わり。いいな？」

なのはの頭を撫でながら優しく言う。

「うっ、はい」

返事はしたが、なのはは心底残念そうだ。

「大丈夫だよ、そんな顔しなくても。また一緒に遊ぼう」

俺はまた一緒に遊ぶ約束をする。

「ほんと!?!」

俺の言葉を聞いてなのはは花の咲くように笑う。

「ああ、ホントだ。約束な。ほら、指切り」

俺は小指を突き出す。

「うん!?!」

なのはは嬉しそうに俺の小指に自分の小指を絡める。・・・そして一緒に歌う。

「ゆびきり」

「げんまん」

「うそついたら」

「はりせんぼん」

「のゝます」

「「ゆゝびきつた」」

歌い終わると俺たちは小指を離す。

「約束だからね。りょうくん」

「ああ、わかってるよ」

「えへへ」

本当に嬉しそうだな。やっぱりなのはには笑顔が一番似合うな。

まあ、それは他の子達も同じかな。さてと、そろそろ……

「なあ、なのは。なのはのお父さんが入院してる病院ってどこだか分かるか？」

俺は次の目的、土郎さんの治療をするためになのはに土郎さんの居る病院を訊いた。

「ふえっ？う、うん知ってるけど、どうして？」

なのはは不思議そうに訊いてくる。

「いや、なんか心配でさ、お見舞いに行こうかと思って」

「おみまい？」

「ああ、なのはも一緒に行こうぜ。一緒に行って、なのはの元気を

分けてあげればなのはのお父さんもきつとすぐ良くなるよ」

「ほ、ほんと!?!」

なのはの問いに笑顔で答える。

「ああ、本当だ。きつと良くなる。だから、一緒に行こう。なのは  
俺はなのはに手を差し出す。

「うん!いこう、りょうくん!」

なのはは俺の手を握り、引っ張って走り出した。

「お父さんの病院は、こっちな!」

「ああ!」

なのはに案内されて俺達は土郎さんのいる病院へと向かった。

「こっが、お父さんのいる病院なの」

「……ここが」

俺はなのはに案内されて、やってきた病院を見上げた。けっこう大きな病院だ。

(ここに、士郎さんが……)

俺たちは病院に入って、看護婦さんに士郎さんの病室を訊いて、向かった。

三階まで上がって一つのドアの前で止まった。横のプレートに、『高町士郎』と書かれていた。

「ここが、お父さんの病室」

俺はドアを開けた。中には全身を包帯で巻かれた、見るからに重傷な男の人がベッドで横になっていた。この人が、なのはの父親の高町士郎さんか。

「お父さん……」

なのはは士郎さんに近づく。

「お父さん、なのはは元気だよ。お母さんも、お姉ちゃんも、お兄ちゃんもみんな元気だから、でもみんなお父さんのこと心配してるよ……」

なのははそつと士郎さんに囁くように言う。

「はやく、元気になってね。なのはの元気、いっぱい分けてあげる

から。だから……はやく……元気に……なって……  
・お父さん……」

とても辛そうなのはの声。それでも涙を堪えて言葉を紡ぐ。自分の祈りが父親に届くことを祈って。

「なのは、俺もなのはのお父さんに挨拶したいから、ちょっと外で待っていてくれるか？」

なのはの肩に手を置いて外で待つように伝える。

「グスツ……うん」

服の袖で涙を拭いてなのはは外に出てドアを閉める。

俺はなのはが外に出たことを確認すると、この病室の中に防音用の結界を張る。

「さて、これでよし」

俺は士郎さんに近づく。

「初めまして、士郎さん。俺は神薙療、なのはの友達です。あなたを助けに来ました」

そう言って、士郎さんに手を翳す。

「<sup>クワイ</sup>治癒」

俺の翳したてから柔らかな光が溢れ出て士郎さんの全身を覆う。

俺が使った魔法はネギまの魔法の初歩の回復呪文である。それでも俺が使えば個程度の傷数分で跡形も残さず治療できるのだが、あまり一気に治すと怪しまれるので意識が戻る程度に止めておく。

やがて、徐々に光が消えていく。そして土郎さんを覆っていた光が全て消えた。治療が終わったのだ。

「ふう。とりあえずこんなもんかな。どうだアラストール、マルコシアス？」

俺は治療の出来をアラストールとマルコシアスに訊く。

『ふむ、悪くはないな』

『まあ、初めてにしちゃあ上出来なほうだな』

二人から及第点が出る。

「そっか・・・良かった」

俺は安堵の息を吐いた。

「さて、治療も済んだし、そろそろ出るか」

『うむ、それがよかろう』

『だな、あんまり遅えと嬢ちゃんが変に思うだろうしな』

結界を解いて、俺はドアを開ける。廊下でなのはが椅子に座って

待っていた。

「あ、りょうくん。もういいの？」

俺に気づいて近寄ってくる。

「ああ、まあな。さ、帰ろっ？家まで送ってくよ」

俺はまたなのはにてを差し出す。

「うんっ！！」

なのはは笑顔で握り返す。

俺たちは来た時と同じように手を繋いで病院を後にした。

第九話 治療（後書き）

次回は必ずシスコンにO H A N A S H Iです。

楽しみにしててください。

何か感想や意見などありましたらいつでもお送りください。

ではまた次回お会いしましょう。

## 第十話 対決 御神の剣士（前書き）

さて、今回は高町家のシスコンとのバトルです。

戦闘描写が上手く書けたか不安がありますが、頑張ってみました。

では第十話始まります。

## 第十話 対決 御神の剣士

S i d e 燎

士郎さんの治療を終えた俺はなのはと手を繋いでなのはを家まで送っている途中である。俺は歩きながら士郎さんの負った怪我について考えていた。あんな重傷を負って生きているなんて流石は御神の剣士といったところか。それと治療しているときに思ったが、士郎さんほどの実力者がそんな簡単に事故にあうものだろうか？・・・まさか、誰かに命を狙われた？

あり得ないことじゃない。俺はとら八のことはよく知らないが、たしか士郎さんは桃子さんと結婚する前は要人のボディガードをしていたと聞いたことがある。もし命を狙われたのなら、やったのは間違いなく士郎さんに仕事の邪魔をされた連中だろう。そして士郎さんが死んでいない以上また士郎さんを襲う可能性がある。今度はなのはたちにまで危険が及ぶかもしれない。十分注意しておこう。さしあたり、なのはの家の周りに式神をいくつか放って見張らせておくか・・・。

「・・・くん。・・・りょうくん」

「・・・ん？」

「どっかしたの？」

なのはが俺の顔を覗き込んでくる。・・・ちよ、近い近い。

「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」

俺はそう言っただけなんでもない風に振る舞う。

「ふうん。……あ、りょうくん、あそこがなのはのお家なの！」

なのはは綺麗な看板のついたお店を指差す。その看板には【喫茶翠屋】と書かれていた。

（おお、ここが翠屋か。まさか生で拝める日がこようとは）

俺はりりなのの世界で有名な喫茶店翠屋に実際に来ることができてちょっと感動している。

「よかったらはいって、りょうくん。お母さんたちに紹介したいから」

なのはは俺にお店のなかに入るように促す。

「いいのか？」

「うん！」

俺の問いかけになのはは笑顔で肯定した。

「それじゃあ、お邪魔するか」

空いてるほうの手で俺はドアを開けてなのはと一緒に店のなかに入る。喫茶店だからかお店のなかからは甘くて良い匂いが漂ってきた。

「お邪魔しまーす」

「ただいまー」

店に入ると俺たちの声を聴いて、奥から女性が出てきた。

「はい、ってあらなのは」

「お母さんー!」

なのはは嬉しそうにその女性に抱き着く。・・・やっぱりか。

「ただいま。お母さん」

「おかえりなさい。なのは」

女性は優しく微笑んでなのはを受け止める。

この人がなのはの母親の高町桃子さんか。っていつか実際に見るとほんとに若いな。これで三人の子持ちって、ありえないだろ。なんだ、高町家はサイヤ人の血でも引いてるのか?・・・ありえそ  
うで怖いな。

「ところでなのは、この子はどなた?」

桃子さんが俺のことを訊いてくる。

「りょうくんっていつの!なのはのお友達になってくれたの!」

なのは嬉しそうに俺を紹介する。

「初めまして、神薙燎です。なのはちゃんの友達になりました」

俺も自己紹介をする。

「そうなの。ありがとうね、りょうくん。ちゃんとご挨拶できて偉いわね」

桃子さんは優しい笑みを浮かべて俺の頭を撫でる。……むう、これは完全に子ども扱いされてるな。まあ、今の俺の外見じゃあ仕方ないか。

「でもなのは、女の子なのにりょうくんはちょっと変じゃない？」

と桃子さんはなのはの俺の呼び方を指摘する。……って桃子さん！あなたもですか！？

「あ、あのねお母さん。りょうくんはね、男の子なの……」

なのはが桃子さんの誤解を解く。

「え……そうなの？」

驚いた顔で俺を見て、なのはに訊く桃子さん。

「そうなの」

頷くなのは。

「あ、あらやだ、私ったら……ごめんなさいね、りょうくん」

慌てて謝る桃子さん。……いや、別にいいんだけどね。もう諦めたし。

「いえ、いいんです。女顔って自覚ありますから。なのはにも間違わられたし……」

そう言っただけなのはジト目で見る俺。

「うう……」

俺の視線を受けてなのははサッと目を逸らす。

「そ、そう……あっ、そうだわ！ねえ、りょうくん。よかったらケーキでも食べていかない？」

唐突に桃子さんが言うてくる。

「えっ？でも俺、お金持ってないし」

そう、今の俺には手持ちの金が一銭もない。上手いと評判の翠屋のケーキは是非とも食べてみたいが、払う金が無いのではどうしようもない。

「いいのよ、お金なんて。なのはと仲良くしてくれたお礼に……ね」

そう言っただけにウィンクする桃子さん。……美人はなにをやっても様になるな……と俺は思わず感心してしまう。つか

この人ホントに綺麗だよな。ちょっとドキツとしたぞ。こんな人と  
ゴールインするなんて、士郎さんもやるな。

「いいんですか？」

「もちろん」

桃子さんは笑いながら言ってくれた。ほんとにいい人だ。

うーん、ここまで言ってくれて断るのは逆に失礼ってものかな？  
それに翠屋のケーキをタダで食える機会なんてそうそう無いだろう。  
このチャンスを逃す手は……ないな。

「それじゃあせつかくですから、お言葉に甘え」なのは！……  
ん？」

俺が答えようとする俺の言葉を遮ってなのはを呼ぶ声が聞こえ  
た。声のしたほうを向いてみると、そこには十五、六歳くらいの顔  
つきが士郎さんに似ている青年が立っていた。

「あ、恭弥お兄ちゃん……」

「あら、恭弥」

なのはと桃子さんが青年の名前を呼ぶ。

恭弥……そうか、こいつがシスコンで有名な、なのはの兄貴  
の高町恭弥か。たしかこいつも御神の剣士なんだっけ？

「なのは、いったいどこに行ってたんだ！心配したんだぞ！」

出てくるなりなのはに怒鳴る恭弥。

「う、ごめんなさいお兄ちゃん」

暗い表情で謝るなのは。……まったく、もう少し言い方つても  
のがあるだろうが。大体心配だど？どの口が言いやがる。そんなこ  
と云う資格がお前に……。

「まったく、反省しろ。この忙しいときに皆に迷惑を掛けるんじゃない  
お兄ちゃん、ちょっと待て」……？

おい、いまこいつなんて言った？……迷惑？なのはが迷惑を  
掛けたって言ったのか？……ふざけんな。今までののはがど  
んな気持ちでいたと思ってるんだ。誰にも迷惑を掛けたくなくてい  
い子でいようと我慢して独りぼっちで泣いていたなのはの苦しみが  
分かるのか。なのはのことは見ようともしていなかったお前に。

「なんだ……君は？」

恭弥はやつと俺に気づいたように言う。

「俺は神薙、なのはの友達だよ。一つ訊くけど、あんたがなのは  
をずっと独りぼっちにしてるお兄さん？」

俺は挑発的に訊く。

「なに？」

恭弥の目つきが険しくなる。だがその程度で怯む俺じゃない。

「聞こえなかったのか？あんたが自分の妹の面倒一つ見られない駄目兄貴かって訊いてるんだよ」

俺はさらに恭弥を挑発する。

「なっ、なんだと！」

恭弥は案の定俺の挑発に乗ってきた。

「さっきから聞いていれば勝手なことばかり抜かしやがって、ずっとなのはをほつたらかしにしておいてこんな時だけ兄貴面か、ここまでくると呆れを通り越して感心するよ。まったく大したものだ」

「き、貴様っ！」

すごい形相で俺を睨み付ける恭弥。

「り、りょうくん」

なのはが俺を心配して声を掛けてくる。桃子さんもハラハラした様子でこちらを見ている。

「今のあんたになのはを叱る資格があんのか？この子を叱るなら、一つでも兄貴らしいことをしてから叱りやがれ！妹の面倒一つまともに見られない奴が偉そうなこと言ってんじゃねえ！！」

俺は腹の底から叫ぶ。ここまで頭に來たのは久しぶりだ。

「だ、黙れ！お前に何が分かる！！」

叫び返す恭弥。

「わかんねえよ！自分のやるべきことをはき違えて家族をほったらかしにしてる奴の気持ちなんて分かりたくもねえ！！」

ああ、そつだ。こいつは自分のやるべきことをはき違えてる。こいつが今やらなければならぬことはこんなことじゃない。

「いいだろう。道場に来い！その減らず口、黙らせてやる！！」

そつ言つて店の奥に歩いていく恭弥。

「恭弥、待ちなさい！」

桃子さんが止めようとするがどうやら聞こえていないようだ。

「大丈夫ですよ桃子さん。ちょっと行ってきます」

俺は安心させるように言つて店の奥に向かう。ちよつと良いあいつの目を覚ましてやるとするか。

「あ、待ってりょうくん。なのはもいくの」

心配なのか俺についてくるなのは。

「ああ、ありがとう」

俺はなのはお礼を言う。

なのは案内されて道場に着くと恭弥が二本の木刀を持って待っていた。

「よく逃げずに来たな」

「逃げる？なんでお前如きに逃げる必要がある」

恭弥の挑発に挑発で返す。

「覚悟しろ。二度とそんな口が利けないようにしてやる」

二本の木刀を構える恭弥。その構えからかなりの腕であることがわかる。

「どうやらこの様子じゃ、完全に頭にきてるようだな。だがな、それはこっちも同じなんだよ。」

「こんなにも容易く相手の挑発に乗せられるとはな、腕のほうはともかく、精神面は些か以上に未熟なようだ」

「ありゃあ完全に頭に血が上ってんな。これじゃあ、どっちが子供だかわかりやしねえぜ」

アラストールとマルコシアスが辛辣な評価を下す。

「まったくくだな。しかし、だからと言って手加減する気はないがな」

「うむ。当然だ」

「おうよ、やっちまいな。我が鋼鉄の拳骨、神薙燎！！」

「行くぞ!!」

「来やがれ!!」

俺と恭弥の決闘が始まった。

恭弥は凄まじいスピードで踏み込んできて、上から剣を振り下ろす。しかし俺はこれを軽く横にずれて躲す。

「なっ!?!」

驚く恭弥。どうやら今の一撃で決めるつもりだったようだ。俺を嘗めていたな。

「どうした?何を驚いているんだ?」

「く、くそっ」

またさらに踏み込んできて剣を振るう恭弥。今度は横薙ぎに振るうが俺はそれも躲す。しかし今度は恭弥も引かずにさらに打ち込んでくる。

右薙ぎ、左薙ぎ、袈裟切り、逆袈裟、切り上げ、唐竹割りと次々に両方の木刀を操り剣撃を繰り出してくるが一つとして俺にかすりもしない。俺は恭弥の剣撃全てを完全に見切り躲しているのだ。

「くそっ、なぜだ!?!なぜ当たらない!?!」

自分の技を悉く躲される恭弥。その顔は驚愕に彩られている。

「なぜ当たらないかって、それは簡単だよ。お前の剣は確かに速いが、動きが単純なんだよ」

そう、恭弥の剣は確かに速いが、それだけだ。頭に血が上っているせいで動きが勢いに任せすぎていて実に読みやすい。俺は振り下ろされてくる剣を片手で掴んだ。

「な！？く、くそっ、放せ！」

恭弥は俺から剣を引き剥がそうとするが、魔力で身体強化をしている俺の手はびくともしない。

「………こんなもんかよ」

「なに？」

「こんな程度の力のために、お前はなのはを傷つけたのか？」

「なっ」

「ふざけんな！！」

ドゴォー！！

「ぐはっ！！」

俺は恭弥の横っ面を思いつきり殴り飛ばした。あまりの威力に木刀を手から放して吹っ飛ぶ恭弥。

「おい恭弥、なんで士郎さんがお前に剣術を教えたと思うっ？」

「なに……？」

俺は恭弥に問い掛ける。立ち上がりながら訝しげに俺を見る恭弥。

「どうして士郎さんは、お前に剣術を教えたんだ？」

俺は足を魔力で強化して軽く瞬動を使い恭弥に肉薄する。

「なっ!？」

目を見開く恭弥の腹にボディーパーを叩き込む。

ドガッ!!

「じぶっ!」

「こんなことをさせるためか？お前に自分の仇を打ってもらっためか？」

さらに二、三発続けて打ち込む。

ドグッ!ーガスッ!!

「あがっ!ごはっ!!!」

拳を打ち込むたびに恭弥の顔が苦悶に歪む。

「違うだろ。そうじゃねえだろっ!!!」

叫ぶと同時にアッパーを放ち、顎を打ち上げる。

ズガンッ！！！！

「がはあっ！！！」

恭弥の体が跳ね上がるが、俺は服の襟を掴んで逃げられないようにする。

「お前に強くなつてほしかったのは、お前に……家族を護つて欲しかったからだろ！！！」

俺はまたさらに恭弥を殴る。何度も何度も殴り続ける。拳に意思を込めて殴る。俺の想いがこいつの心に届くように、土郎さんの気持ちが届くように。

「自分になにかあったときのために、自分に代わってなのは達を護つて欲しかったからだろ。お前ならきつと守ってくれるって信じてたからだろ！それなのにお前はなにをやってんだよ！！！」

ドガッ！！ゴスッ！！

「うがっ！！ぐふっ！！！」

「なのはをほつたらかしくして、怖がらせて、それが兄貴のやることかよ！！！」

ドグウッ！！！！

「ぐはあっ！！！」

俺は一際強く拳を腹に叩き込む。こいつのひん曲がった根性を叩き直すように。

「恭弥、兄貴つてのがどうして一番最初に生まれてくるか知ってるか？」

俺は一度殴るのをやめる。

「え．．．．？」

「それはな、後から生まれてくる弟や妹を護るためだ」

「！！」

「その兄貴が、自分の妹を苦しめてんじやねえっ！！」

「．．．．．」

「お前の父親に比べればどうってことねえだろうがな」

俺は拳を思いっきり振りかぶる。

「少しだけお前の目を覚まさせてやる。自分のやるべきことがなんなのか、もう一度よく考えやがれ！この馬鹿野郎！！！」

「ドゥマァー！！！！」

「ぐぶあぁあ！！！！」

止めの一発を顔面に叩き込んだ。恭弥は吹っ飛んでそのまま壁に激突して、そのままずり落ちると気絶したのか動かなくなった。

こうして俺と恭弥の対決は終わった。

## 第十話 対決 御神の剣士（後書き）

いかがでしたでしょうか？お楽しみいただけたのならよかったです。

それでは今回はこの辺で。皆様からのご意見、ご感想お待ちしております。おります。

ではまた次回お会いしましょう。

なるべくはやく無印編に入れるように頑張ります。

それでは！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4122x/>

---

魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

2011年11月3日01時03分発行